

研究を手伝い人的交流を深め 国際社会に向かう

戦後生まれの新制の地方国立大学の一つ岐阜大学は二〇一九年で誕生から七〇年を迎える。医学部、教育学部、工学部など五学部と大学院研究科などが自然に恵まれたキャンパスに集結する中規模総合大学で、近年は特徴を活かした高度な専門職業人の育成や質の高い研究、地域に根差した国際化を展開している。同大学学長、森脇久隆さんに話を聞いた。

——大学の歴史について教えてください。

森脇 一八七五年設立の岐阜県師範学校、同県公立病院付属医学校が前身で、一九二三年に誕生した岐阜高等農林学校なども統合されて一九四九年五月、岐阜大学が設置されました。当時は学芸学部（後に教育学部）と農学部（同応用生物科学部）の二学部。岐阜高等農林は後に名古屋大学に統合される安城高等農林と共に東海地

区に二校だけだった高等農林でした。そして五二年に工学部、六四年に医学部、九六年、地域科学部（旧教養部）が統合されて五学部になりました。

——各学部の特徴については？

森脇 応用生物科学部は飛騨牛など付加価値の高い農畜産物を品種改良や開発で支えています。植物ではイチゴやバラ、（富有）柿などです。最近では海外、例えばベトナムではハイテク農業で野菜

作りを技術指導しています。輸送に強い農産物を作り、輸出につなげる方向です。

一方、特に大学院留学生の受け入れも多く、また優秀であることが特徴で、帰国してから企業のトップに就いた人も出はじめています。

さらに獣医学科は首都圏と大阪間では岐阜だけで附属病院もあり主に（九八％）ペットの診療に臨んでいます。がん治療で最新設備が整い、効力を発揮しています。一方、大型の家畜などに対応する「岐阜県中央家畜保健衛生所」が今年六月、キャンパス内に開設され、鳥インフルエンザが流行った時などには最前線に対応すること

になります。

工学部では環境とものづくり、防災面に特徴があります。環境・エネルギーでは八百津町で水素社会の実証実験を行っています。目標は太陽光から水素（アンモニア）エネルギーを作りタンクローリーでたとえば植物工場に運び、電気に戻して使う。エネルギーの地産地消です。防災では土木構造物のメンテナンス。トンネルや鉄橋などの劣化を補強する人材の育成。私どもと長崎大が強いんです。が、公認資格化を目指しています。関連して今年八月に鉄橋とトンネル、盛土の実物大模型を備えた施設「インフラミュージアム」が開設されました。